



南葵音楽文庫ミニレクチャー vol.37 記録

ロシア
魯西亜救済慈善音楽会

～ドビュッシー『放蕩息子』今年は没後 100 年

泉 健(和歌山大学名誉教授)

2018 年 11 月 9 日(金) 18:15

南葵音楽文庫閲覧室(和歌山県立図書館内)

南葵音楽文庫

和歌山県立図書館内

和歌山市西高松 1-7-38

tel.073-436-9500

ロシア革命後、ソヴィエト政権から逃れてきた白系ロシア人を救済するという意図から、南葵楽堂で魯西亜救済慈善音楽会が開催されました。演奏会の日時は明記されていないのですが、1920 年(大正 9 年)の 12 月頃だったようです。また演奏された曲にも不明なものがいくつかあるのですが、全体としてみると、デュボア、ギルマン、デュパルク、ドビュッシーなど、近代フランス音楽を中心とした演奏会でした。

近代フランス音楽の楽譜や古楽の楽譜を収めたスナール社の「室内楽シリーズ」の楽譜は、1921 年から刊行され始めたのですが、南葵音楽文庫にはこのシリーズが購入されています(近藤秀樹「スナール社の挑戦—南葵音楽文庫に眠る室内楽シリーズ—」『南葵音楽文庫紀要』第 1 号,2018 年)。当時の日本では、西洋音楽といえばドイツ・オーストリアのものが中心とみなされる傾向が強かったのですが、南葵音楽文庫では、このように当初から広い視野を以て西洋音楽を捉えていたことがわかります。この魯西亜救済慈善音楽会は、当時の日本でフランス音楽に注目を促すという貴重な役割を果たしたものと思われるが、この音楽会の南葵楽堂での開催が可能になったのは、このような南葵音楽文庫の基本姿勢があったからではないでしょうか。

1920 年といえば徳川頼貞侯が 28 歳の時ですが、この年は彼の人生の前半で非常に輝いていた年でした。1918 年の南葵楽堂竣工の後、1920 年春にはイギリスからパイプオルガンが到着し、数ヶ月かかって設置された後、11 月 22 日から 24 日にはその披露演奏会が開かれました。また 10 月 2 日からは南葵音楽文庫の閲覧も開始され、12 月 11 日にはベートーヴェン生誕 150 年記念の音楽会が南葵楽堂で開催されています。魯西亜救済慈善音楽会は、おそらくその後に開催されたものと思われます。

この音楽会の前半は、パイプオルガンでメンデルスゾーンやデュボアやギルマンの曲が演奏され、設置されたばかりのこの楽器の豊かな音色が、南葵楽堂に朗々と響き渡りました。後半はデュパルクの「ため息」「悲しき歌」、ドビュッシーのカンタータ『放蕩息子』の冒頭の母親のアリアなどが歌われました。ドビュッシー(1862-1918)は今年没後 100 年になります。彼は調性・機能和声からの離脱を図ろうといたのですが、彼の入学したパリ音楽院では、それを厳格に学習することが求められました。そのような中で、彼はこのカンタータを作曲することによって、やっとローマ賞を受賞することができたのです。



デュボア, T.



ギルマン, A.



デュパルク, H.